松本市教育研修センターだより

No.６　令和４年１０月５日

教職員の働き方改革に向けてのプロジェクト始動
～波田小学校の実践に学ぶ～

【9月7日　松本市教育委員会ホームページ　教育長通信より】
（前略）実は、この８月から、波田小学校の教職員の皆さんが、自ら一歩を踏み出そうと、「未来の教室」実証事業に参加してくれています。国が実施するこの事業は、全国で学校の働き方改革のコンサルティングを展開している「先生の幸せ研究所」の支援を受けながら、学校の先生方が自ら状況を変える成功体験を積み重ねることで、働き方改革とともに向上と連帯の気風あふれる文化をつくりあげことを目的としているもので、全国の学校や教育委員会が参加されています。
今回このプロジェクトには、波田小学校の伴走者として、市教委の事務局職員も参加していますが、波田小学校の皆さんの前向きな取組みに大いに刺激を受けています。今後この実証事業の成果が市内の学校にも広げられるよう取り組んでいきたいと思います。

教育長通信にありますように、波田小学校では「働き方改革プロジェクト」が始動しました。９月 14 日の職員会後半で行われた「働き方改革のワークショップ」に市教委の事務職員２名が参加しました。
最初にプロジェクトの推進リーダーから「本日のテーマは『一度やめてみる』です。突飛なアイディア大歓迎！どんどん出してください」という提案があり、ワークショップを開始しました。

「ワークショップ（学年、特支、専科養護事務等の8グループ）の進め方」

10 分間：波田小学校職員のクラスルームの「未来の教室ワークショップ（Google ジャムボード）」を開き、付箋に「1度やめたい」と思うことをどんどん書き込む。その際、「こうすればいいんじゃないか？」というアイディアがあれば、ジャムボードの同じ付箋に書く。

10 分間：グループのメンバーで話し合いながら、付箋を「今すぐ削減できるもの」と「削減できるが検討が必要なもの」に分けていく。終了したグループは、他グループのフレームを見に行く。

「ICT 研修も兼ねている」と三輪校長先生が言われたように、先生方はタブレット上の Google ジャムボードを用い、「１度やめたい」ことを次々に付箋に打ち込んでいきました。その後、グループごと「これはすぐ削減できるな」「これは、すぐには無理だな」「いや、できますよ」などと楽しそうに話し合いながら、付箋を移動させていました。波田小学校の先生方が自由にジャムボードを使いこなしている姿や、「働き方改革」という一つの目標に向かってみんなで生き生きと語り合っている姿が心に残りました。市教委も「伴走者」として波田小学校の実践に共に学んでいきたいと思いを新たにしました。

ジャムボードに打ち込む先生方

お問合わせ等は教育研修センターへ
0263-87-9909
e-kensyu@city.matsumoto.lg.jp

「小学校国語授業づくり」「小学校算数授業づくり」「スクールミドルリーダー」
ワークショップ型研修がスタートしました。

今年度、教育研修センターの新規事業として実施する「ワークショップ型研修」がスタートしました。「先生方のニーズを踏まえ」「短時間で効率よく」「参加者同士の協議で学び合う」ことを大切に考え、それぞれ複数回シリーズで企画し、ご案内したところ、多数の参加申し込みをいただいています。参加者の皆さんが、熱心に参加され協議を深められた、各研修の第１回講座の様子をご紹介したいと思います。

「上月先生と学ぶ小学校国語の授業づくりの基礎基本」　9/18

松本大学教育学部の上月康弘先生を講師に迎え、国語の授業づくりの基礎基本を学ぶシリーズの第１回は「ごんぎつね」。「ごんの死の伏線はどこかわかりますか」という上月先生の問いかけに、テキストに向かい、話し合う先生方。「教材研究の大切さ」を学び合いました。

【感想より】

◆上月先生のお話で「ごんぎつね」の面白さに改めて気づき、このわくわくした気持ちを大事にしたいと思いました…

◆…まずは自分自身が教材をしっかり読み込み、理解した上で伝えたいことの核を持っていたいなと思いました…

「〇〇主任のお仕事ゼミ」ミドルリーダー研修　9/22

各学校で中核的に学校づくりに取り組まれている〇〇主任の先生方とともに「ミドルリーダー」のあり方について学び合い、自分らしい一歩を踏み出す見通しを持つことを願った講座の１回目。教育研修センター長の「ミドルリーダーに期待すること」の講義を交え、先生方は熱心に日頃の実践や悩み等について、語り合われていました。

【感想より】

◆講師や経験豊富な先生方のお話をお聞きし、学校全体に目を向けていく責任や使命について勉強させてもらいました。◆ミドルリーダーの役割についてしっかりと自分と向き合って学ぶことができました。◆同じ立場の先生方と交流を図るシステムは今後も参加してみたいと思えるものでした。◆（自分の役割を自覚し）できることを進めていきたいと強く思いました。私も挑戦したいと思います。

算数の授業を語り合う会 「たし算とひき算の ひっ算　子どもたちにどう教えますか」9/20

私たち教える立場の者が、算数・数学を『知っているつもりになって教えているかもしれない』という意識をもっていただければと思います」この佐藤先生の声掛けのもと、慣れない３進法の計算に挑戦し、初めて「ひっ算」を学ぶ子どもの気持ちを体験し、自分の指導を振り返る契機となりました。

【感想より】

◆課題をやっているとき、必死に考えました。きっと子どもたちも同じ気持ちなのだなと感じました。

◆子ども一人ひとりにいろいろな考え方があることを実感できました。「こうでなきゃ！」という考えばかりで進めていた気がしたので、もっと子どもたちの考えに寄り添える教材研究をしていきたいと感じました